

# カガミの裏

やくに たつよ

## 第一章（追憶）

---

「帰ろうか、涼太」

日曜の昼下がりに、東京都町田市、小さな公園。

健二は、今年5才になる涼太と公園の砂場で、泥だらけの手を見せ合う。どちらが、汚れているのか

勝負しているようだ。

健二は、大きな声で、公園を走り回る子供たちを、微笑ましく眺める。

そして、公園の母親たちのなかには、彼の亡き妻、ひとみを頭のなかで、編集する。

亡き妻は、おしゃべりで、天然で、健二をいつも拍子抜けさせていた。

健二の宿直後の朝、帰宅すると、彼女は、敷布団と掛け布団と間違えて、眠っている。

彼女が料理を作り、健二と食事中も、料理に使った長い箸で、納豆をかき混ぜ、白ご飯にそれをかけて、

その箸で食べ続ける、エプロンをしながら。

よくなんでもない場所で、つまずき、顔面から、地面に打ちつけ、大声で泣く。

健二にとって、もう、それも、6年前までの、思い出であった。

涼太が生まれ、その1年後、原因不明の熱で、急死した。

義父、博史とは、今も、連絡をとり、博史の家に、涼太と遊びに行くこともある。

義母はおらず、ひとみにとって、博史は、里親である。

ひとみは、交通遺児であった。彼女が、両親との死別後、博史が、彼女を引き取った。

健二は、そのひとみと、合コンで、出会った。

やはり天然である彼女に惹かれるのに、そう時間は、必要ではなかった。

健二の誘いを彼女は簡単に、受け入れ、その次の日、堂々と、その予定を忘れていた。

健二にとって、彼女は、逸材であった。

「おとなしくて、その割りに、しょうもない注文をする女より、この天真爛漫な子が、いいわ」

「いないいない、パー」 健二は、涼太とじゃれながらも、涼太を見れば、彼女を思い出してしまう。

「いない、いない、、、」 健二の頬には、涙を流しすぎて、涙で出来上がった溝すらあつ

てもおかしくは  
なかった。

そうすると、涼太は、彼の小さな腕と手と顔で、健二に訴える。

彼の耳は、音をひろうことができない。彼の口は、音を作ることができない。

未熟児で生まれ、生後3ヶ月の時、彼は、高熱で、耳の機能を失った。だから、手話で、彼は、  
父親と

意思を示さなければならない。

健二の心に、なぎが訪れるまで、健二は、涼太を抱きしめた。